淨土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十一年六月廿日印刷納本　昭和二十一年七月一日發行

第十二卷　第三號

六・七月合併號

『淨土』の復興に就て

闔宗諸大德に愬ふ

率直にお願ひいたします。過去十二年間「淨土」が闔宗の皆様の絶大な御愛護と御高評の下に、他宗の方々からさへも愛讀されて、教界に五歩を印してきました事は誠に嬉しいことでございました。

然るに昨年の五月二十五日、事務所は遂に戰火に見舞はれ、唯一の經濟的基礎であつた二萬餘の會員名簿をはじめ器具も在庫品も一切烏有に歸してしまひました。係員は鋭意その復舊に努力し八方苦心の末、漸く先般、復舊版として三月號を、續いて四月號を發行する事が出來ましたが、會員名簿燒失のため、皆様へ直接お送りする事が出來ず、止むを得ず配給會社の手によつて、全國の書店へ出した次第です。

然しこれでは經營の基礎がたちません。「淨土」のやうな特殊雜誌では、どうしても固定讀者を得ない事には、續刊は不可能ですしそれに現在では紙代も印刷代も、一切新圓でなくては駄目であります。配給會社からの賣上代金は封鎖小切手、銀行からは使用人の寡少のため諸經費の支拂ひを受けることが出來ません。從つて、どうしても新圓で拂込まれる振替や小爲替に頼らねば、毎月の會計が成立ちません。十二年の學宗協力の輝しい歴史を有する「淨土」もこのまゝでは廢刊の憂目を見るより外ありません。然し道義地を拂つた現在の日本にこそ、「淨土」に依る佛教宣布、淨土教の弘通は、最も緊急なものと思ひます。本誌が復興すれば、あの偉觀を誇つた二萬餘の會員も、漸次私達の手に歸つてくる事と存じます。起死回生の道は、一にかゝつて諸大德の熱烈な御援助に俟つより外ありません。苦しい中から、ともかく今號を出しました。今後は、總らゆる印刷工場の惡條件を克服して發行日をとり戻し、十月頃からは確實に其月に發刊し得る見透しもつきました。どうか本宗唯一の社會的布教雜誌を復活せしめるため、是非この際會員になつて下さる事を、お願ひいたします。尚雜誌製作費の莫大な値上げ、郵税の改正等のため**一ケ年購讀料金二拾圓**（郵税共）に會費を訂正せざるを得なくなりましたが、何卒御諒承下さいまして、御入會の上、會員獲得に御力添へ願ひたく、伏して懇願いたします。

法然上人讃仰會
里見達雄
中村辨康
黄野正順

目次

「淨土」はあるかの問題に就て……（三）　中村辨康
盆の前……（八）　浦野芳雄
淨土隨想
新しき者の出生……（五）　友松圓諦
一枚起請文……（六）　貴司山治
短編
ケ
コ……（一三）　サガ・カズミ
再生記……（一二）　川端祐輔
編輯後記……（一六）

「浄土はあるか」の問題に就て

中村辨康

この四月號所載の仙臺松田氏からの御質問の「浄土はあるか」の問題に就て「信仰相談欄」では字数に制限があつて意を盡すことが出來なかつたので、もう一度それを補足する意味で書くことにする。

前にも云つた通り世の中には單なる存在はないのである。存在と感じつゝあるものは無數にあるけれども、事實は皆な變化し續けて居るものばかりである。然かも私達は一切の物象を存在と見つゝそれへの「執着」からのがれることが出來ないので、何時までもその惑へる考へと、それから爲す業と、その業の結果たる苦みとのこの「惑業苦」の輪廻から離脱することが出來ずにあへぎにあへぎ續けて居るのである。しかるにこの輪廻を斷らしつゝある考へ方と同じやうな考へ方を以て「浄土」の存否を考へることは全く誤りである。

即ち「ものがある」と云ふ考へは根本的に正しい考ではない。日常生活する上に於て便宜の爲に一應かく見て居るまでのものである。だからと云つて凡ては「ある」のではない。例へば「國體」と云ふものは果して存在としてあるのであらうか。あることはあるらしいが、決して「ものの存在」ではないのである。

また「いのちは」あるにはあるらしいがこれまた「存在」のやうなありかたとは違ふのである。

それと同じやうに一切の事々物も實は「置かれてある」のではなくして「變化しつゝ」あるのである。宇宙が渾沌の狀態から電子を發生しその電子の集合離散に依て九十二の元素が發生し、その元素の集合化合に依て小宇宙が出來、小宇宙から星が出來、星から遊星が出來、遊星の中に礦物植物動物が出來て終に人間文化にまで發展して來たのであるから、そこには何も固定的な存在はあり得ない筈である。若し强いて求めるならば太初より

今日まで一貫して居るものは實に「時間」でしかないのである。

然るに「時間」とは「いのち」に外ならないのであるから、大宇宙は無量無限の生命を根抵として發展して來たものであつて、その「無量壽」こそは天地一切の事象の根元なのである。

さればこれを宗教的な見方から人格的に云つて「阿彌陀佛」とし、またその場所として「阿彌陀佛國土」即ち「淨土」とするのである。

此の故に「淨土」や「阿彌陀佛」を存在として見やうとするならば、必ず失敗するにきまつて居るのである。私達が現在の縛れた生活から救はれて信仰生活の悦びを味はんとするのに、いつまでもその縛れた考へを捨てないで居ることは、丁度綱につながれて居りながら遠方へ行かうとするものであり、もやいを解かずに舟をこぎ出さうとするものであつて、出來ない相談なのである。

淨土や阿彌陀への信仰は實際の體驗を必要とする。しかもそれは佛教の根本原理に抵觸するものであつてはならないのである。即ち三法印に抵觸するやうでは、正しい佛教ではないのである。諸行無常諸法無我涅槃寂靜の三法印は切り離さずに一とまとめのものとして宗教批判の標準としなければならない。この故に淨土を「存在」として見やうとすることは畢竟この「無常無我涅槃」の標準に合はないことになるのであつてその誤りであることは極めて明諒である。この故に體驗と雖も三法印に異するものは正しくないのである。然かも若し體驗を得ることは困難であり自分には覺束ないと考へるならば、それはかつて親鸞上人や其他の人々の採つたやうに「よき人の教を信じ切る」ことである。この法式ならばその外に何の穿鑿もいらないのである。なまじ穿鑿して見たところで大したことは出來ないからである。

要するに自分の考へは「存在視」に終始して居るのであつて、凡べて顚倒の考へでありそれ以上には出られないのであるから色々の穿鑿も畢竟無駄骨折りに過ぎない

またそれでは物足らないならば、一心に念佛するより外はないのである。禪宗派の坐禪もよいし、眞言流の觀法もよいにはよいが、然し念佛の方がより直接的であるだけに體驗が一層よりよく役立つからである。

かくして小さな存在觀的思想から離れて如來の大生命への歸命が出來るところに、思想上の根本的置き換へが自然に出來るやうになるのであつて、その時始めて誰にきかなくとも「淨土」の問題が解決するに至るであらう。

浄土隨想

新しき者の出生

友松圓諦

舊い者が追放されて、新しい者が出生して來る。これが人生の、そして亦、宇宙の不易の眞理である。

宗教界も日日に激變しつゝある。保守的に見える宗教界はあるひは一番はげしい變化をうけてゐるかも知れぬ。新らしい宗旨が宣言せられ、古いものへの別辭がのべられてゐる。武運長久を祈禱した神佛への失望と裏切りとは決して宗教への否定でも、背信でもない。かうした民族的宗教は、今一段たかい世界宗教、宇宙的神格への新しい出發を意味してゐるのである。一つの國家を本位とした利己的信仰はもつと純粋な、人道的なものへ發揚されなくてはならない。耀尊や法然上人のいだかれた信仰内容はさうした純粋なものであつたと思ふ。敗戰日本をふきまくつてゐる背信的傾向は、それは舊い日本的宗教の追放であり、新しいものゝ出生を意味する。

昨是今非、きのふまでの指導者が拘置所入りをする。過去の偶像、今までの價値が顚覆されてゆく。しかし、これは新しい價値の發見であり、樹立への努力である。内容の伴はなかつた空虛の偶像が當然にくづれて行つたにすぎない。淋しいやうに思へるのはたゞ過去に對する無知の執着にすぎぬ。去るものを追ふべからず、來るものを拒まぬことだ。何が無窮に動かぬ價値であるかを知つてゐる佛教徒は、今日こそ平然として篤敬三寶の所信に忠でなくてはならぬ。佛、法、僧、この三つの至寶にまさるものはこの地上にたえて無いわけである。人格、眞理、團結、われら佛教徒はたゞこの三寶に合掌する。

自覺者こそが最高の人格者であり、萬人敬仰の對象である。誰が尊い人物であるかはその血統でも肩書でもなく、覺者こそ兩足尊である。諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三法印、この三つの眞理を體得し、實行するものが覺者であり、この道理に立つた團結こそが永久の繁榮である。新日本はこの不易の三寶の線にそつてのみ正しく出生する。

凡そ、二十五世紀の體驗をもつた佛教はあらゆる人間の歴史を通り越して、靜かにこれを送り、これを迎へてきた。諸行無常、つくられたるものうつりゆく、この冷嚴な第一の法印を胸にひめて人間の浮沈を送迎してきた。「時」の哲學者、佛教にとつては、それゆゑに、この日本の遭遇した今日の運命はさほどのおどろきではない。恭間、りうけとられてゐる如く、佛教は諸行無常の眞理を「死」の眼鏡で見てゐるのではない。歐米の思想哲學が「生」の肯定に立つてゐるやうに、新しい者の出生に對して佛教徒は暖かい希望をもつてこれを期待してゐる。亡びるものは亡びよ、

崩るゝものは崩れよ、しかし、新に出生するものは、諸法無我、このよにあるものひとりあらず、この第二の法印に立つことを要求する。その法印を民主主義の名で呼ばうと、協同主義の異名をつけようと、其はどうでもいい。この二つの法印を體得せる、涅槃寂靜、おのれなきものにさかえあり、といふ第三の法印に徹せる念佛人に於てこそ、新日本は建立されることを忘れてはならぬ。

いまや、新しいものが出生しようとしてゐる。信教自由とは本當の人間の出生を意味する。正しい宗教的信念をもつた人間によつてこそ、新日本はきづき上げられることを約束したのである。明治新政府は國家と皇室から佛教を離籍した。教育は宗教を追放した。そこに皇室の神話化と教育の機械化とがある。官製ハガキのやうな優等生が文武百官の椅子をしめおはつたところに敗戰日本が出現したのである。それは當り前のことである。かうなるより外に仕方がないのである。然し、日本の新春はつひにめぐつてきた。日本人は誰に憚かることなく三寶を篤敬し、三法印をかみしめることが許された。天のものが天に、地のものは地に戻されたのである。とりわけ平民法然、黒衣僧法然の民主主義的宗教の力強く此日本の處女地に出生する時である。

すべての因襲から眞裸にならなくてはならぬ。古い革袋をぬぐことだ。思ひきつて時代の汗垢を落とすことだ。

一枚起請文

貴司山治

私のやうな無信心なものでも、幼少のころ祖母からつたへられた法然上人に對する尊崇の念心は、永久にきえないで今ものこつてゐる。

もちろん私の祖母などは眼に一丁字もない人で、一枚起請文にいふ無智愚鈍のともがらである。さういふ人の口からつたへられたゞけにそれは風の聲、雨の音のやうにかへつて純粹に私の童心にしみ入つたのであらうか？少くとも一枚起請文の趣旨を以てすれば、さうであらうと思はれる。

私は阿波の小島の古い暖い家の、安燈の灯かげで、體の大きな祖母のかたはらに坐り、佛壇にゆらぐ燈明（油皿にトーシンの灯である）をみながら、祖母が一枚起請文を誦するのに口調をあはせた幼い自分の姿をいたましく思はずにはゐられない。今では四十年も昔だ。幼い私の耳や心には、何の意味もわからず、ただ氣の遠くなるやうな厭世の心持ちが、念誦につれておこつてくるのを不思議に感じた。古ぼけて色のうすれた墨繪の感じであつた。

それに反して、松蟲鈴蟲の出てくる御詠歌は——やはり祖母からきか

されるのであるが——俄かに美くしい五彩の繪卷物であつた。よくはわからないが、京の鹿が谷とか、黒谷とかの松籟の中に寺の甍がうす日にひかり、その中に青入道の藍色の頭がみえ、錦の袖をひく上臈の白い顔がみえ、何故かその襟がはばのひろい綠色の錦であつたのを、さういふ幻の繪を、瞼のうちにやきつけられ「鈴蟲松蟲兩女人」といふ御詠歌の詞の「リョウショニン」とながアくひいてうたふ口調の中に、これはもう一生きえ去らない。

私が少し大きくなつて、これらのつぎほも、ない感情や、きれきれの幻の繪卷の背後に、私の眼にはどうしてもうつつてこないすぐ背後に、未だ人の形さへおびない絶對的な人間のゐるのをおぼえた。それはたしかに人間なのである。しかし、その人間は、佛——上天に住む創造者——と直接語るべき何等かのつながりを持つてゐる。

少年の私はその人の存在を心のなかにとらへようとして、たえず一種の心のなやみを感じた。これが法然上人に對する私の「信仰」のあはい思ひ出のすべてである。しかし法然の數々の弟子たちをはじめ、松蟲や鈴蟲のやうな有髪の俗人たちが、ひたすらにさびしみあこがれて、あの人生の悲劇の中へさへ、心をひかれて行つたものを、少年の心がどんなに同じやうに惹かれたことだらうか？

大人になつて、ことに知識人の生活を營むやうになると、最初の心にうつつてきたこの純粹な宗教心ともいふべきものは他のものに形をかへてしまふか、きえてなくなつてしまふかするのが常である。現代では特にさうである。

私なども、二十何歳かの頃は、懷疑思想者であり、ウォルター・ペーターの信者であり、アミエルの日記の陶醉者であつたが、そのころ、ふとしたことで黒谷の山内で、超覺院といふ塔頭の離れ座敷をかりて、三四ヶ月住んだことがある。

そこで結婚し、やがて東京に引越し、作家となり、未だにかうして浮世の中にゴミを吸つて生きてゐるのであるが、結婚當時黒谷の山内に一しよにくらした妻は、世を去つても う五年にもなる。黒谷のあのしづかな山内が私はこの上もなく好きで、妻めくる前、ひとりでよく散歩しては敦盛の塚のところまで行つたものだ。熊谷堂のせせこましい畔りにたち止つては、熊谷のやうなむくつけな東北武士の心に、どうしてあの物語にあるやうな遁世の機緣が生れたのか分らない思ひであつた。

今おもへば、熊谷は一枚起請文にいふところの「さかしき學者」でなかつた故に、ああいふ飛躍をなしえたのだ。しかし、今おもへども熊谷の心は私には不思議である。妙なる氣味合ひである。

このごろ、私は二十年の東京の生活を捨てて、丹波の山奥でくらしてゐる。時々京に出る。まだ戰時中のある日、私はふと法然院から黒谷の山内を歩いてみた。

法然院はひつそりと世に忘れられてゐたが、眞如堂は、いつかの年燒失して新しい伽藍が建ち、木の香もあらはに、あたり一面、防空壕などの掘られてゐるのが（十二頁へ）

盆の前

浦野芳雄

精進

精進には、村の年寄が寮へ集つて、牡丹餅を慥へて食べた。子供心によく覺えてゐるのは、精進だからと云つて、寮へ遊びに行つて見ると、横になつてゐた老人達が、むつくと身を起して、

「おい。相撲をとれ。牡丹餅をくれるから。」

「なあ、おい。取つて見ろ。大かい牡丹餅をくれるぞ。」

口々に子供達を關つて、笑ひながら私達をそゝのかした。

相撲を取ると、勝つても負けても、大きな牡丹餅が貰へた。

私達は、何だか知らぬが、精進と云ふ日には、村の年寄が、寮へ集つて、牡丹餅をまろめて食ふものだと思つてゐた。

俗に「精進牡丹餅」と云ふ言葉がある。それは大きなるが故である。成程、精進の牡丹餅は大きい。私達は小さな手に持ち餘したものだ。

「ふん。でかくて持ち切れねえか。お皿でも貸してやれ。」

私達が、片手で抓み切れないで、兩手で持上げてゐるのを見て、老人の一人は、寮の緣から、くれ終つて、又横になつた者に呼びかけた。

「なあに、奴等の口に、餘るものがあるものか。すぐ食べてしまふわい。」

云ふ側から私達は頰張つて、と云ふより嚙りついて、飴チョコのやうに、餅に食ひつくと、中から眞白な握りが出て來る牡丹餅を、石地藏の前に蹋んだり、二十三夜塔の側へ腰を下したりして食べ合つた。

お釜の口明け

間もなく「お釜の口明け」が來た。精進が七月の末で、お釜の口明けは八月の朔日である。

お釜の口明けには、地獄で佛さまが、煉獄の口をあけられるのだと聞かされてゐた。そして家々では牡丹餅を作つ

秋

た。黄粉の牡丹餅は饐えぬとか云つて、翌朝、食べ残りを焼いて貰つて食べた。その日になれば、鹽辛いのでもたのもしかつた。

精進には飼物は解放せねばならなかつた。木に這上つたり、蛛蜘の巣の網で捕へたりして、きりぎりすの籠に同居させておいた蟬は、籠の口をあけて、逃がしてやらねばならなかつた。

それが、お釜の口明けになると、もう生物を捕へることは許されなかつた。勿論、蟬や蝕斬を捕へることなどは、嚴に警められてゐた。

「では、頰白も逃すのかい。」

お爺さんは、頷くもなく、頷かぬともなく、唯、「うんうん」とほつくりをしてゐた。

頰白は、もちはがで捕つて、飼ひ馴らしておいたので、この春先には、よく囀つた。鳴ぎ止んだので、聊か飼ひ飽きたが、それでも手離すのは惜しかつた。

「寮の小父さんは、鶉を飼つておくよ。」

お爺さんに掛合ひ込んだが、お爺さんは、唯、「うん〳〵」と云つて、ほく〳〵してゐるばかりであつた。

逃した後で、寮へ行つて見たが、まだ寮の小父さんは、鶉を飼つてゐた。鶉籠には、下縁に網が張つてあつたが、鶉は、中の小砂を蹴こぼして、出たがつてゐた。それのみならず、奥には、遂ぞなかぬ鶯も飼つてあつた。

「寮の小父さんはまだ逃がさないよ。」

私は家へ歸つて、お爺さんに訴へた。

寮の留守居は、百姓は身に滲まぬ代りに、さういふ藝當には、頗る魂膽してゐた。寮に居て、生物を飼つておくのは面白くないと云ふので、村も議論があつたが、さて面と向つて抗議するものもなかつたので、そのまゝになつてゐた。それ所か、春先になると、彼は囮籠をさげて、目白を捕りに行つた。

「山寺の椿の林へ行くと、次の春には屹度なくのが捕れる。も一羽なくのが居るが、どうも悧恰でいけねえ。」

夕方、ぱた〳〵暴れてゐる目白を、逆ふ籠に入れて持つて來た。彼が小鳥を捕る名人だつたのも無理はない。この村へ流れて來た時は餉差だつたさうである。

より以上、私達の辛かつたことは、下げ針をして鰻をとることの出來ぬことであつた。土用鰻から、引續いて、流し針をして、川や堀で、鰻や鯰を捕ることは、そして朝早く、川霧をついて、針上げに行くのは、幼き日の無下なる樂しみであつたのが、この日から、全くさせられなかつた。

「精進といふのが、さう云ふのだ。」

お爺さんは、もうその日から生臭は決して口にしなかつた。

秋

七晩燒

お釜の口明けの晩から、七晩燒が始まつた。夕方になると、家々の門には、小麥藁の小さな束が立てられた。村の小供は、次々にそれを焚いて行つた。

「火は氣をつけるのだよ。」

親達は、次から次へと燒き次いで行く子供達に向つて聲をかけた。

子供等はそんなことには、頓とお關ひなく、棒千切れや、小竹の先へ火をつけて、それで火をつけて行つた。麥藁は、氣持よく、ぱち〳〵と音を立てゝ燃えさかつて、門先の草生に燒け崩れた。燒跡の小草は樹く燒け爛れて、黑い灰を殘した。

七晩燒には、その火度へ、よく桑の葉を燻べて燒いた。桑の葉は、鰯が燒けるやうに、まるまつて焦げた。

今はその頃の思出を殘すだけで、私はその葉にどんな味があつたか覺えてゐない。けれども最近になつて、桑の葉に相當の蛋白質が存在するとか、ビタミンを多量に含んでゐるとかで、食糧としては最適のものだと云ふ說を唱へる者がある。その時分は、どうして桑の葉を食べるのだか、唯悪戯にするのだとしか思つてゐなかつた。けれどもこの日に桑の葉を燒いたのなどは、何か佛家のさうした因緣によるものではないかと考へられる。村の古老は、山牛蒡は掘つて見さへすれば、誰にでもすぐ分ると云つた。山牛蒡には、首根の所に小さな穴がある。それは弘法大師が

「これが山牛蒡だ。」

と杖で突いて示した跡だと云ふのである。兎角佛家は非常な物識りであるから、何か今日の榮養學の上廻つた知識を、こんな行事にも、兼ね教へたものかも知れない。

然し小供の悪作はそれには止まらない。今度は葱を燒いた。一本葱の太い白根は、麥藁の火の中で、快よく燒けた。それを引出して脫ぐと、もう〳〵煙を噴いて、强い香がした。その小臭い所を、吹き〳〵食べた。

生葱のまる燒は、妙荷の花に移つた。私達は、家で夕飯だと呼ばれても、まだ七晩燒の火の所にくすぶつてゐた。

家へ這入る時は、荐りに灰を敲き返したものだから、頭髮は灰神樂を浴びてゐるし、顏は眞黑になつてゐた。それが汗に流れて、頸の周圍や咽喉は、垢だか、埃だか分らなくなつてゐた。

「又悪作をしてゐたな。」

一見、親達に觀破されて、鋭く叱り飛ばされた。

「よし。そんな物を食ふと、死んでしまふから。佛さまはお盆で來ると云ふに、お前達は行くんだ。來る人に頭を叩かれないやうに、摺鉢を被せてやるんだぞ。」

威かさられると、もうそんなことはしなかつた。

「地獄へ行られるぞ。」誰かゞすると、私達は戒めた。

再生の記

川端祐輔

再生の記

（一）

とめどなく流れる涙の始末をどうしたらいゝかしらん、そんな甘つたるい感情を想ひやるのが、歸還船の話が出る度の甘いよろこびであつたのに、故郷の山々がはるかに見えても、「あれが爆撃の跡らしい」と平氣でその赤肌を眺めるだけで、一向に感傷のたかまる胸のどよめきは起つて來なかつた。

上陸第一歩もそんな譯で、ふみこたえのないものであつた。私は「これでいゝのだ」と靜かに反省した。かつての復員の樣に、旗の波で甘いお世辭をつかはれて、腹の底からではなく、目もと口もとだけで感激の涙を流すより、どんなに心易かつたか知れない。ゐねむりさへしてゐる米兵の、のん氣な監視振りも有難く思へた。

ある事、ない事、デマがデマを生んで祖國の姿を歪曲して傳へ聞いてゐた現地での悲觀論もこの一見で幾分の落つきを得た。

國民の道義心が地に墮ちたとか、食ふ爲にはどんな事もやりかねない日本人になり下つてゐるとか聞かされた私たちの、私たちこそ道義日本の再建を擔ふ天來の使徒の樣な思ひ上つてゐた氣持も、次第に平靜にならされるのであつた。

捕虜にも等しい各々引揚軍人に對する邪慳な仕打を覺悟してゐただけに、上陸地のお茶の接待などに心なごむものがあつた。

車内の混雜や食糧買ひ出しの見苦しい爭ひの烈しさは、今更、同胞の墮ちた道義心ではなく、教家の指導缺如によるもと〳〵すたれてゐた道義心が、こんな非常時に首をもたげたに過ぎないのだ。

科學に敗れ去つた日本は道義心に於いて、はるかに彼等の敵ではなかつたのであらう。

（二）

心ある人々は道義日本の再建を、よるとさはると激しく論じ合つてゐる。當然の事であるが、私には先づ私の心のあり方と行き方を定めねばならない。若い僧侶や教家の情熱はいいとして、私自身、食生活にやゝもすればいやしくさもしい根情の捨て切れないことを反省と徒らに道義を叫ぶ聲のうつろさに羞恥を感ぜられてならない。多かれ少かれ他人に道義を說く反面、自己を家族を愛し過ぎる心の狹まさに苦慮せざるを得ないからである。

國家の配給通りに食つて餓死した某教授の一例を見て、人々は何と感じたであらう。死を以て國を諫言した國士の風格を私は想ふ。

山から下りた日本の敗殘兵に、かつての名譽ある敵兵として、殘飯を與へるにしのびないと言つた米兵の話や、「名譽ある兵士に馬糧を食はせるとは何ごとか」と、日本の經理官を諫めてくれた英軍將校の紳士的な態度に接して、神の信仰を持つ人々の強さ、心の寛

さに頭の下る思ひがし、私たちはもつと〳〵佛を信じて立派にならねばならぬと感ぜさせられた事であつた。

（三）

寺院に寄生して育つた私には思ひ切つた教團の變革や、無責任な僧團の破壞を叫びえない。心の弱さからであらうか。さりとて私でさへも壇家の葬儀法要のみに教家としての口糊をつなぐ姑息さに勿論滿足はしえない。恐らく若き僧侶の持つ共通の惱みであるかもしれない。

念佛の行者として二十餘年の長き歩みを回顧して、私は幾ばくの生長をしたであらうか。師にそむき、友を欺いて徒らに小さき我を愛する事のみに吸々としてゐたに過ぎない。

心の糧に飢えて三十餘年、今又肉體の糧に飢えて大衆と共に右往左往、この動搖を隱して徒らに道義の宣揚を謳ふ勇氣はない。先づ己が脚下を照顧して、強く大地を踏みしめ、心からなる念佛の正念を相續したい。十年一日の如く驀地に歩み續けてゐる師僧の正行に、今更不斷相續の頼もしさを味ふことが出來た。

自ら何の宗教的信念もなしに僧團の無爲無能をあざけり續けて來た人々の、今日なほ小羊の如くさまよへる姿に比して、白髮霜を戴いて、昨日も今日も本堂に正念相續する師僧の木魚の音のみが私を救ふてくれる天來の音聲である。敗戰に打ちひしがれた同胞、我が兒すべてを戰場に失ひ、而も戰災に無一物となつたどん底の人々に對して、いさゝかの供養なりとも、本堂からもれ出づる念佛の中に汲み取りたいものである。

道義は先づ己からである。退嬰と言はれても私は構はない。それからだと想ふ。

越路の雨は未だじめ〳〵と降り續いてゐる。農作の出來ばえが、又しても氣づかはれる。このふりそゝぐ雨を私はどうすることも出來ないのだ。天にまかせて人をうらまず、自らの精進を續けたい。

この原稿を綴つてゐる間に玄關で、全部で二足しかない靴が二足とも暗夜に紛れて盜まれた。來學期から足駄を作つて學校に通はう。無も又さば〳〵とすがすがしい。「盜人の取り殘したる窓の月」である、不德漢の盜りえない光を私に投げてくれた。（をはり）

（七頁より）

尙更にわびしい光景であつた。

終戰のあとに、日本には飢餓と頽廢の中で、文化の仕事もよみがへつてきた。私は山の中から京の町に出てきては、このごろ雜誌を編む仕事をはじめてゐる。破れた暗い日本の生活に、一本のトーシンの灯をともしそへるほどのはたらきをでも、しなければならないと思ふのだ。

その仕事をする場所を京の町の中に求めた時、ゆくりなくも私は知恩院の門前にその場所を得た。私は自分の仕事の場所で、寒夜を孤坐して嘆息した。私はいつのまにか知らずして、まつたく識らずして、二十年前の、いや四十年前の、私の生涯のはじめの思ひ出につながる場所へひきよせられてゐるのだ。私は淨土宗門の門前にゐる。

私はあきらかに慈悲を感じた。どんなに遠く離れてしまつたと思つても、ふと足もとをみると、やはり佛の掌の中にゐるやうな氣味が私の心にした。私は法然といふ人を親鸞上りもとても好きなのだが、一生のうちにこの偉大な法師の面影を、人間としての深みの中にとらへたいと、今は秘かに思ふのである。

短編

ケ　コ

サガ・カズミ

ケコはことし十になつてゐる。――ケコとは京子のことだが、ちいさいときからうちでみんながさうよんでゐる。きよ年五月、戰災でうちが燒けたとき、東京でひとりだつたぼくは、そのまへの年暮から、國民學校一年生で、緣故疎開の名目で愛知縣下の或町の遠緣のお寺にひとりきり行つてゐたケコのところにとんで行つた。ケコとはもう半年も會つてゐなかつたし、いちばんぼくの氣がかりにもなつてゐたからだ。疎開といへば、ケコの姉と兄は國民學校五年、三年で栃木縣下に學童疎開をし、三つと生まれて間もないちびの二人は母親とともに甲府に行つてゐたが、かういふ戰爭下の一家離散生活の中で、まつたく家族の手からきれて暮してゐるケコだけがぼくの胸をしじう占めてゐたのである。學童疎開の子供たちには空襲下でもちよいちよい會ひにゆけた。しかしケコは遠かつたし、なまじひ親戚に預けたことから出かけてゆきにくかつた。とてもお行儀のいゝ子です、とたまにケコの家の人からたよりがあると、かへつていろいろの氣をまはすのである。ぼくの云ふことをきかない子だつたし、それにケコじしんからは一枚のたよりもよこしてゐない。カナならかけないこともないだらうに――

あさ一ばんでたつて、夕方向うへついた。お寺のだだつぴろい茶の間でくつろぎながらうちの人達と雜談に時をうつしてゐたが、早くかほをみたいと思ふケコはなかなか出て來ない。ぼくはだんだんやきもきして來た。話の途ぎれで、おくさんが、「さうさう、ケコちやんは學校の雜草刈でけふはおそくなります。二年になつてから級長です。」と云つた。ぼくはやれやれと一ぺんに重荷のおりる思ひをした。しばらくぶりでのんびり湯に入り、晩ごはんになつたとき、書院の僕のところへやつとケコがお膳をはこんで來た。おかつぱの前がみが眼のあたりまでさがり、すこしつんとしたかたい表情でぼくのまへに兩手をついて「いらつしやいまし」と挨拶した。が、視線はぼくをつとめてさけてゐる。

「ケコもそばへ來ていつしよにたべなさい。」ぼくは久しぶりのケコに熱いものを感じて云つた。ケコは默つたままおひつをとりに起つて行つた。

「あたしはあちらでいたゞきます。」二度目に來たときケコが改めて云つた。

「戰爭がひどくて東京のおみや何もないんだ。」

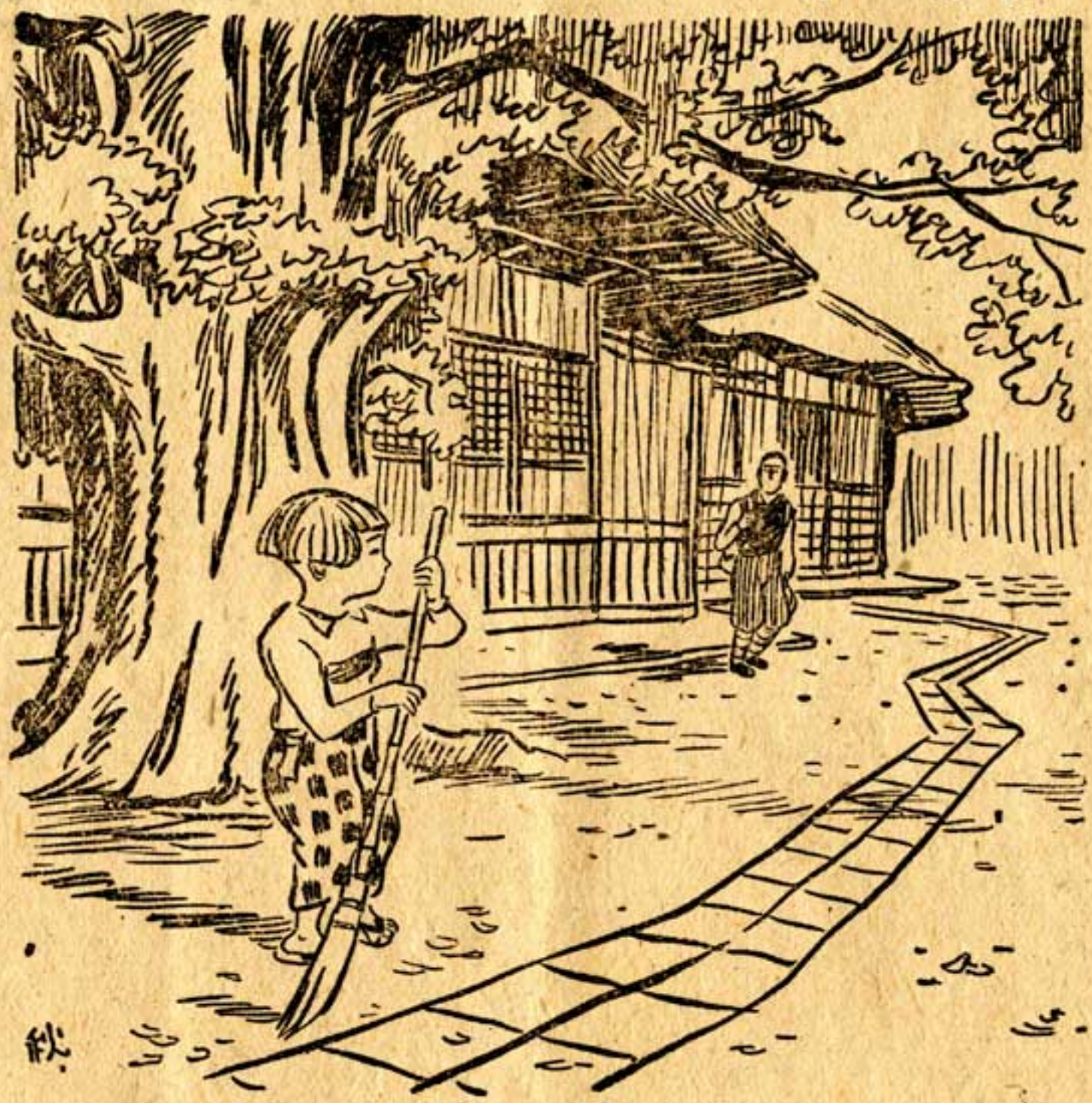
ケコは何の表情も示さない。

「ひとりでさびしくなかつたか、もうぢきお母さんといつしよになれるよ。」

「はあ。」

「早くうちだけでくらしたいだらう。」

ケコは返事をしない。ぼくが「どうだ」と重ねて云ふと、「どうでもいゝです。」ときちんとしたまま答へる。問ひかけなければ話にのらないし、やつとしやべることは無感情のことばだけだ。ケコは笑ひも泣きもしない。お行儀のいゝ子とはかういふのだらうか。



——夜、ぼくがやすむとき、おやすみなさいを云ひに來た。しかし、お父さんの呼稱はなくてすぐひきさがつてしまふ。あさ、ぼくがぐづぐづしてゐるともう學校へ行つてしまてゐない。お寺のしきたりのせゐか、ひるま子供達は大人の仲間に入れない。ぼくは二日間のお客さまだ。ケコはぼくのしらない半年のあひだに、ぼくに對してもお客さまの修行をつんだのだ。東京へかへる夕方、庭掃除の手傳ひをしてゐたケコに、「ほしいものないか」と云つてみたが、「何もありません」とていねいに頭をさげてつつばねたきりだ。ケコは驛まで來なかつた。

——東京の燒野に戻つてから、ぼくは甲府の家内に「ケコはまるでよその子になつた、早くひきとらなければいけない」と手紙をだした。終戰間際になつて家内はちび二人にケコを加へて、ケコのゐた町から五里はなれた山村にやつと住ひをもつことになつた。その住ひにぼくはほとんどゆけなかつたが、家内からのた

よりのあるたびにケコの動靜に氣を配つた。――ケコはむつつりやで云ひつけなければ何もしようとしません。こんどの學校は山を二つ越してゆかねばなりませんので雨ふりはやすませてゐます。町にゐたとき級長だつたさうですが、勉强はきらひな方で休みの日はよろこんでゐます。――疎開まへは氣がつきませんでしたが、ケコはすこしちゐがおくれてゐるのではないでせうか。おとなしいと云はれてゐますが、動作に氣力がなさすぎるやうです。村のお友達もできてゐるのですが、いつも仲間はづれにされます。先日も學校でどんぐり拾ひを云ひつかつてゐたのに、默つたまま何もしません。學校へゆきがけになつてよその子から云はれ私が叱りましたところ、けろりとしたまま學校へはゆきませんでした。弟たちとはよく遊びますが、何かやりかけの遊戯でも忘れてしまふことがあります。大人なら戰爭ボケとか云ふんでせうが、子供だからこまります。

これはやつぱり戰爭のために家庭教育を荒されたむくいだとぼくはおもつた。子どもをひとりはなしておいた罰だと思ふほかない。しかも暫くするうちに、ケコ自身のたよりがぼくのもとにとどくやうになつた。オトウサンニハヤクアイタイデスとかくやうになつて來た。――ことしの正月、三日ばかり行つて來た。ケコはいゝあんばいにちびたちとけんかをし、うたをうたつてゐた。「お父さんの東京ぢや、こんなにおいもやおもちたべられんだらう。」とぼくに云つて、はじめて笑つてみせた。

三月、燒あとのバラックにうちぢうが戻つて來た。學童疎開の大きい兄姉ともいつしよになれてケコはすつかり元氣になつた。五つになつた弟を連れて、朝、T驛に省線電車を見せにゆくのがケコの日課の第一だ。驛にゆけば電氣機關車、煙の出る貨車も見られる。それをちびがむしやうによろこぶ。これを夕方、もういちど繰返す。夕刊買ひである。しかしこのときはなるべくちびをさけるやうにする。ちびが闇市の飴やの店さきでえんこしてしまふのでうるさいからだ。たまにケコは小指ほどの飴棒を一本買つて來る。それを二つに折つて、その一つをちびにわたす。もう片方は朝のおめざだからねとさとす。「あめはかむんぢやないのよ、しやぶつてんのよ。」こんなませた云ひ方で、ケコは姉の見識を示してゐる。

ぼくら一家のこれからの課題はきびしい社會の現實をいかに乗りきつてゆくかのことだが、子どもたちが環境からすこしぐらゐの歪んだものの見方を教へこまれても、まづひと安心のていだ。（ケコはもうひとりで田舍へゆくのはこりごりだと云つてゐる。）

笑ひ話

〃まつたくの話しが、かう毎日物が上つてはやれきれないよ。何か一つでも安くなるものを探した　なら、拾圓やるぜ〃　〃ありがたい安くなるものと言つたら、ホレ、その金さ〃

編輯後記

◇今號から再び「淨土」を編輯することゝなつたが、私は今、創刊當時の、あの燃えあがつた純眞な宗教的感激を想ひつゞけてゐる宗祖鑽仰の澎湃たる宗門の輿望に應へ、眞野、中村兩先生の下に敬虔な同信的結合にかたく結ばれて、始めて「淨土」を送り出したあの感激を！。

◇あれから既に十幾星霜が過ぎ去つた。平時でも十年と言へば一昔前であるが、この十年は文字通り疾風怒濤の時代であつた。幾世紀にも價する激しい變化が齎らされた。

◇激しい變動の中に泰然と發行をつゞけて來た「淨土」、誌齢既に十二年、小册子とは言へどの雜誌にもひけをとらぬ貫録を備へてゐた事は、復員直後の私の最も大きな喜びであつた。

◇それは道瀬、村瀬、辻、池田成田の歴代編輯者のなみなみならぬ努力に負ふところであるが、又嵐の時代にも動搖しなかつた宗祖鑽仰の熱烈な信仰が、裏づけられてゐた爲である。

◇民主日本の確立は、刻下緊急の課題である。その理論や口説は如何なる僻村にも氾濫してゐる。

然しそれは各人が眞理に徹し人格を高めることになつて完うせられる事を銘記しなければならない。愚かな背信の國民の中には、決して眞の民主々義は完成されない。

◇アメリカ今日の繁榮の基礎を築いたのは、宗教的自由を求めて總らゆる困窮を克服した淸教徒であつた。絢爛たる物質文化に目をうばはれ、享樂生活のみを眺めて父祖から流れ來たりし心奥のこの宗教心を見落してゐた處に、アメリカ曲解の最大理由があつた。そして、それは敗戰の原因でもあつた。

◇宗教的人格の確立なくしては、民主日本の眞の確立はない。法然上人の人格を通じて、今日の日本に寄與せんとする「淨土」の責任は重い。不才を省みず、不惜身命、總らゆる悪條件を克服して編輯に精進する覺悟である、切に讀者の御聲援をお願ひする次第である（東）。

—記—

新刊

吉田絃二郎著

武藏野記

B6版 二〇〇頁　十三圓 送二圓

豫約受附中

發行所　船形書院
取次所　法然上人鑽仰會

淨土 六・七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和二十一年六月二十日印刷納本
昭和二十一年七月一日　行

東京都芝區芝公園淨土宗務所
編輯兼發行人　眞野正順

東京都芝區芝公園淨土宗務所
印刷人　村瀬秀雄

東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二
（東京一）
印刷所　大日本印刷株式會社

配給元
東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所　法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園淨土宗務所內
振替東京　八二一一八七番
會員番號　B一〇八〇一四

購讀料
一ケ年　金二十圓
（送料共）
振替拂込みはすべて三十錢增のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十一年六月廿日印刷納本　昭和二十一年七月一日發行